

# 想像の産物に対する幼児の認識に文化的文脈が影響を与える可能性 架空の存在や魔法のような力に対する大人の信念に注目して

Influences of cultural contexts on young children's perception of imaginary substances  
focusing adults' belief on fictional characters and magical power

塚 越 奈 美\*

TSUKAKOSHI Nami

**要約：**本研究は、幼稚園児の保護者を対象に、①サンタクロース、②おばけや幽霊、③魔法のような力、④絵本やアニメの登場人物、⑤ぬいぐるみが生きているかのように接する、⑥空想の友達存在、の6項目について、子どもの信念と保護者自身の信念についてたずねた調査結果を報告するものである。保護者は、自分の子どもがサンタクロース、おばけや幽霊の存在を信じており、ぬいぐるみを人間のように扱っていると認識していたが、空想の友達はいないと認識していた。また、保護者自身、6項目すべてにおいて「今でもときどき信じたくなる」と答えた者が一定数おり、特におばけや幽霊、魔法のような力については、その人数が有意に多い傾向にあった。「かつて信じていた」年齢は、おばけや幽霊では小学校高学年という比較的高い年齢までであったのに対し、ぬいぐるみや絵本の登場人物については、就学前という幼い年齢以降は信じなくなっている傾向が示された。

**キーワード：**幼児、大人、架空、想像、信念

## I. 問題と目的

幼児がサンタクロースなどの架空の存在や魔法のような力の効力を信じる姿は、私たち大人にとってほほえましくかわいらしく感じられる。しかし、このような姿はいつごろまで継続するのか、あるいは、周囲の大人が示す言動によって、このような信念がどのように変化するのかなどについては、十分に明らかにされていない。

幼稚園児の保護者 166 名を対象に、自分の子どもが、架空の存在や魔法のような力の効力を信じていると思うかどうかをたずねた質問紙調査（塚越，2007）では、次のような結果が示されている。「わが子は願いごととサンタクロースの存在を結び付けている」と 128 名の保護者が認識しており、「わが子は願いごとをすれば、それが実現すると信じている」と認識している割合も 7 割を超える高い傾向が得られた。これは幼児が大人とは異なり、魔術の世界の住人であるという私たちの直観を支持する結果である。

私たちは、幼い子どもほどこのような傾向を強く持ち合わせ、年齢を重ねるごとにその傾向は弱まっていくと考えがちである。確かに、大人は日常生活で、誰かに架空の存在や魔法のような力の効力に対する信念を問われた場合、それらに否定的な態度を示すことだろう。しかし、それは本当に「信じていない」ということを意味しているのだろうか。

小学校 4・5・6 年生を対象に、ベネッセコーポレーションが実施した「おばけとジンクス（1994）」というアンケート調査では、次のような結果が示されている。「トイレの花子さん」といういわゆる

\* 幼児教育講座

おばけの存在を「本当に見た人がいる」と34.3%が肯定し、「神仏はいるか」という問いに対しては「絶対いる」と「もしかしたら、いるかもしれない」をあわせると44.6%もが肯定的に答えている。大人になっていく過程で、私たちは架空の存在や力に対して懐疑的になり、やがては信じなくなると想定しがちであるが、実際には年齢の比較的高い小学校高学年児でもおばけや神仏の存在を肯定している。このことから、大人もまた、そのような信念を表面上示さないだけで、実はそれを持ち合わせている可能性があると考えられる。

筆者はこれまで、心と外界との関係に関する子どもの認知的な発達に注目して研究をおこなってきたが、これらの研究の多くが文化的文脈と切り離された状況で実施されてきたという指摘がある(Woolley, 2000)。そこで、本研究では、塚越(2007)による質問紙調査において別途調べられた、願いごと以外の魔術的な力や架空の対象を子どもがどのように認識していると思うかを保護者にたずねた部分と、保護者自身の認識についてたずねた部分に焦点化して分析・考察することによって、心と外界の関係に関する幼児の認知的な発達に、大人の認識という文化的文脈が影響を与える可能性について検討することを目的とする。

## II. 方法

**調査対象者** 幼稚園児の保護者166名(内訳は、年少児の保護者29名、年中児の保護者70名、年長児の保護者67名)であった。

**質問紙の構成** Woolley, Phelps, Davis, & Mandell(1999)の質問項目を邦訳し、ほぼそのままの形で採用した。これらに加え、富田(2002, 2003)を参考にして、保護者自身に関する質問を追加した。作成された質問紙は、(1)「子どもは願いごとをどのようなものと理解していると思うか、またその効力を信じていると思うか」に関する6項目(下位項目も含む)、(2)「子どものもつ願いごとの効力に対する信念にどのように対応しているか」に関する5項目、(3)「願いごとに関する家庭環境はどのようなになっているか」に関する10項目(下位項目含む)、計21項目で構成されていた(詳細は、塚越(2007)を参照)。

本研究では、同じ質問紙内で上記とは別に、願いごと以外の魔術的な力や架空の対象に対する子どもの信念についてたずねた項目群と、同じ内容を保護者自身についてたずねた項目群について分析をおこなった結果を報告する。具体的な質問内容は、次の6点である。①サンタクロース、②おばけや幽霊、③魔法のような力、④絵本やアニメの登場人物、⑤ぬいぐるみが生きているかのように接する、⑥空想の友達の存在、であった。①から④の項目は、子どもの信念については「信じていると思う」「信じていないと思う」「わからない」の3件法で回答を求め、保護者自身については「信じていない」「かつては信じていた」「今もときどき信じたくなる」「今も信じている」の4件法で回答を求めた。⑤と⑥の項目は、子どもの信念については「している(いる)」「していない(いない)」「わからない」の3件法で回答を求め、保護者自身については「しない・したことがない(いない・いなかった)」「かつてはしていた(かつてはいた)」「今もときどきする(ときどきあらわれる)」「今もしている(いる)」の4件法で回答を求めた。また、①から⑥までの項目で、保護者自身に関する質問への回答で「かつて信じていた」「かつてはしていた(いた)」を選択した場合には、それが何歳くらいまでであったかについて自由記述形式で年齢の回答を求めた。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 架空の存在や魔法のような力に対する子どもの信念についての保護者の認識

①サンタクロース, ②おばけや幽霊, ③魔法のような力, ④絵本やアニメの登場人物, ⑤ぬいぐるみが生きているかのように接する, ⑥空想の友達, の6項目について, 「信じていると思う (している・いる)」「信じていないと思う (していない・いない)」「わからない」の4つに回答を分類し,  $\chi^2$  検定をおこなった (Table 1)。その結果, 人数の偏りに有意差がみられた ( $\chi^2(10)=329.818, p<.01$ )。

そこで, 残差分析をおこなったところ, ①サンタクロースについては, 「信じていると思う」が有意に多く (164名中157名), 「信じていない」と「わからない」は有意に少なかった (それぞれ1名と6名)。②おばけや幽霊については, 「信じていると思う」が有意に多く (164名中120名), 「信じていない」が有意に少なかった (15名)。③魔法のような力については, 「わからない」が有意に多く (163名中56名), 「信じていると思う」と「信じていないと思う」は有意に少なかった (それぞれ87名と20名)。④絵本やアニメの登場人物については, 「わからない」が有意に多く (163名中55名), 「信じていると思う」が有意に少なかった (64名)。⑤ぬいぐるみについては, 「している」が有意に多く (164名中120名), 「わからない」が有意に少なかった (8名)。⑥空想の友達については, 「いない」が有意に多く (164名中97名), 「はい」と「わからない」が有意に少なかった (それぞれ52名と15名)。

以上から, 保護者は自分の子どもについて, サンタクロース, おばけや幽霊の存在を信じており, ぬいぐるみをあたかも人間のように扱っていると認識していることがわかる。反対に, 空想の友達はいないと認識しているといえる。魔法のような力や絵本やアニメの登場人物については, 他の項目に比べて, 子どもがどう認識しているのかについての把握が難しいことがわかる。しかし, 実数をみると, ⑥空想の友達以外の5項目は「信じていると思う (している)」が「信じていないと思う (していない)」を上回っており, 全体的には子どもが架空の存在や力を信じる傾向にあると保護者が認識していることが明らかになった。

Table 1 架空の存在や魔法のような力に対する子どもの信念についての保護者の認識

	サンタ N=164	おばけ N=164	魔法 N=163	絵本 N=163	ぬいぐるみ N=164	空想の友達 N=164
はい	157(97)	120(73)	87(53)	64(39)	120(73)	52(32)
いいえ	1(0)	15(9)	20(12)	44(27)	36(22)	97(59)
わからない	6(3)	29(18)	56(34)	55(34)	8(5)	15(9)

( ) はNに対する割合

#### 2. 架空の存在や力に対する保護者の信念についての分析

保護者自身の認識をたずねた項目を分析した。まず, ①サンタクロース, ②おばけや幽霊, ③魔法のような力, ④絵本やアニメの登場人物, ⑤ぬいぐるみが生きているかのように接する, ⑥空想の友達, の6項目について, 「信じていない (しない・したことがない, いない・いなかった)」「かつては信じていた (かつてはしていた, かつてはいた)」「今もときどき信じたくなる (ときどきする, ときどきあらわれる)」「今も信じている (している, いる)」の4つに回答を分類した (Table 2, Table 3)。「今も信じている (している, いる)」については0を含むカテゴリーがあるため, 「今もときどき信じたくなる (ときどきする, ときどきあらわれる)」と回答した人数と合算し, 都合3つ

に分類して $\chi^2$ 検定をおこなった。

その結果、人数の分布に偏りがみられた ( $\chi^2(10) = 444.574, p < .01$ )。残差分析の結果、①サンタクロースと⑤ぬいぐるみについては「かつては信じていた (かつてはしていた)」と回答した人数が多く、「信じていない (しない・したことがない)」と「今もときどき信じたくなる (今もときどきする)」と回答した人数が少ない傾向が示された。人数の詳細を見ると、①サンタクロースについては、163名中119名と7割を超える人数がかつては信じていたと回答していた。⑤ぬいぐるみについては、163名中92名がかつてはしていたと回答していた。

反対に、②おばけや幽霊と③魔法のような力については「今もときどき信じたくなる」と回答した人数が多く、「信じていない」「かつては信じていた」と回答した人数が少ない傾向が示された。人数の詳細を見ると、②おばけや幽霊については、163名中103名と6割を超える人数が、今もときどき信じたくなると回答し、③魔法のような力については、163名中79名と約5割が、今もときどき信じたくなると回答していた。

また、④絵本やアニメの登場人物と⑥空想の友達に関しては、「信じていない (いない・いなかった)」と回答した人数が多く、「かつては信じていた (かつてはいた)」「今もときどき信じたくなる (今もときどきあらわれる)」と回答した人数は少ない傾向が示された。

Table 2 架空の存在や魔法のような力に対する保護者の信念 (1)

	サンタ N=163	おばけ N=163	魔法 N=163	絵本 N=162
信じていない	24(15)	25(15)	54(33)	86(53)
かつては信じていた	119(73)	35(21)	30(18)	45(28)
時々信じている	19(11)	60(37)	64(39)	27(17)
信じている	1(1)	43(27)	15(10)	4(2)

( ) はNに対する割合

Table 3 架空の存在や魔法のような力に対する保護者の信念 (2)

	ぬいぐるみ N=163	空想の友達 N=163
しなかった・いなかった	51(31)	134(82)
かつてはした・いた	92(56)	22(13)
ときどきする・あらわれる	18(11)	6(4)
する・いる	2(2)	1(1)

( ) はNに対する割合

### 3. 保護者が架空の存在や力を信じていた年齢についての分析

2. と同じ6つの項目について、「かつては信じていた (かつてはしていた, かつてはいた)」を選択した保護者に対し、「何歳ころまで信じていたのか」を自由記述形式で回答を求めた部分について分析した。回答を「就学前まで」「小学校低学年まで」「小学校高学年まで」「中学生以降まで」の4つに分けた (Table 4)。「中学生以降」と回答した人数は、6項目すべてにおいて非常に少なく、0を含んでいるため、「中学生以降」を除いた「就学前まで」「小学校低学年まで」「小学校高学年まで」の3つの時期に限定して $\chi^2$ 検定をおこなった。

その結果、人数の分布に偏りがみられた ( $\chi^2(10) = 25.778, p < .05$ )。残差分析の結果、②おばけ



や幽霊は、就学前に信じなくなった人数が少なく（29名中2名）、小学校高学年になって信じなくなった人数が多かった（29名中16名）。反対に、⑤ぬいぐるみは、就学前に信じなくなった人数が多く（87名中35名）、小学校高学年まで信じていた人数は少なかった（87名中21名）。また、④絵本の登場人物も、小学校高学年まで信じていた人数は少なかった（43名中7名）。

ぬいぐるみや絵本の登場人物は、就学前という比較的幼い年齢から信じていない傾向にあるのに対し、小学校高学年という比較的高い年齢まで信じている傾向が多いという結果は、問題と目的で記した「おばけとジンクス（1994）」というアンケート調査の結果を支持するものである。

Table 4 架空の存在や力を保護者が信じていた年齢

	サンタ N=115	おばけ N=29	魔法 N=29	絵本 N=43	ぬいぐるみ N=87	空想の友達 N=21
就学前まで	32(28)	2(7)	9(31)	18(42)	35(40)	6(29)
小学校低学年まで	38(33)	9(31)	9(31)	17(40)	30(43)	5(24)
小学校高学年まで	45(39)	16(55)	11(38)	7(16)	21(24)	8(38)
中学生以降	0(0)	2(7)	0(0)	1(2)	1(1)	2(10)

( ) はNに対する割合

## IV. 考察と今後の課題

本研究の目的は、塚越（2007）による質問紙調査において別途調べられた、願いごと以外の魔術的な力や架空の対象について子どもがどのように認識しているのかを保護者にたずねた結果と、それと併せて、保護者自身の魔術的な力や架空の対象に対する認識についてたずねた結果とに焦点を当てて分析・考察し、心と外界の関係に関する幼児の認知的な発達に、大人の認識という文化的文脈が影響を与えている可能性について検討することであった。

まず、架空の存在や力を子どもがどのように認識しているのかを保護者にたずねた結果から、保護者は子どもがサンタクロース、おばけや幽霊の存在を信じており、ぬいぐるみをあたかも人間のように扱っていると認識していたが、空想の友達はいないと認識していた。また、魔法のような力や絵本やアニメの登場人物については、子どもがどう認識しているのかについての把握が難しいようであった。親にとって、子どもがサンタクロース、おばけや幽霊の存在を信じているかどうかは、クリスマスにプレゼントを届けてくれるようにサンタクロース宛てに手紙を書いたり、おばけや幽霊の話を怖がったりする子どもの様子から判断しやすい。また、ぬいぐるみの扱いについても、目に見える行動であるため、魔法のような力やアニメの登場人物についてよりも、子どもの認識が把握しやすく、回答に迷いが少なかったのだと思われる。

保護者自身の回答については、いずれの項目についても「今でもときどき信じたくなる（ときどきする・ときどきあらわれる）」と答えた者が一定数おり、特におばけや幽霊、魔法のような力についてはその人数が有意に多い点が興味深い結果である。子どもが想像の産物がある瞬間には疑い、また別の瞬間には信じているとしか思えない行動を、加用（2010）は「多視点態度性」と呼んでいる。「今もときどき信じたくなる」と答えた人数がどの項目でも一定の割合で見られることは、大人の認識に関しても、加用の多視点態度性という観点から解釈可能であると思われる。すなわち、通常、架空の存在や力などは人間が生み出した想像の産物であると理解している大人にも、自分が置かれた状況によっては、そういった客観的な態度から離れ、想像世界だからこそ可能になる出来事を信じようとする場合もあるという解釈である。しかし、これは、大人が超常現象を不思議であるという感覚を超えて信じ込んでしまうケースとは、根本的に異なるものであろう。なぜなら、超

常現象を信じ込む人々は、個人的な経験など信じてしまうそれなりの理由はあるものの (Gilovich, 1991/1993), ある現象が視点を変えれば異なった結論を導けるという事実を受け入れられない人々であり、本研究の保護者のように、客観的な態度を持とうとすることができていないからである。本研究が質問紙に回答するという方法を取っており、それを提出しているという点から、対象者である保護者は客観的な視点を持って日常生活を送っていると判断できるが、それでもなお、何らかの特別な状況にあるとき、彼らは想像の産物が現実にあると信じたい気持ちになることを意識できていると解釈できる。

また、おばけや幽霊の存在は子どもも信じているが、保護者自身も信じる傾向が強かった。これは「おばけとジンクス (1994)」の小学校高学年の児童とも共通している。これは、私たちが少なくとも物心ついた段階から、おばけや幽霊を信じていることを示しているが、大人がその存在を信じる傾向を持ち続けていることが、子どもたちの信念に影響を及ぼしているという可能性も考えられる。また、ぬいぐるみや絵本の登場人物を、親は自分の経験では就学前という比較的若い年齢から信じなくなると報告していた。そして、保護者の多くが、わが子はぬいぐるみを人間のように扱うと答えている。これは、ぬいぐるみが移行対象という愛着の一形態であることを考えると、自然な結果であると思われる。移行対象とは、自分の居場所を確認したり、新奇な状況で高まる不安を抑えるために、幼児期の子どもがよく利用する「肌触りが良く、握りしめたり・匂いをかいだりできるぬいぐるみや毛布などの対象物」を指す。この移行対象を持つという状況は、子どもが表象能力を獲得することによって、母親という実際の愛着対象に触れたりにおいをかいだりすることから一歩進み、その代わりにぬいぐるみなどがあれば不安を抑えることができるという発達の現象であり、移行対象は幼児期の子どもの心の支えとしての役割を果たすと言われる (井原, 2009)。そのため、幼児期にはぬいぐるみを人間のように扱うといった姿がよく見られ、保護者自身もそういった経験をしてきたのだと思われる。

問題と目的で述べたように、私たち大人は、他者とのかかわりの中では、架空の存在や力を信じていることを認めない。しかし、本研究で明らかになったように、それらをまったく信じなくなっているわけではない。ヴィゴツキー (1974) や Karmiloff-Smith (1990) によれば、生活経験が豊かである年長者の方が、その生活経験をもとに、想像世界を豊かに思い描くことができるという。ここから考えれば、日常生活においては、大人は想像世界に没頭し、架空の存在や力の存在を全面的に肯定するようなことはしないが、現実にはあり得ないことであると思いながらも、時に想像の世界が現実になる可能性に思いを馳せることで、現実世界では得られない楽しみや喜びを得ているのかもしれない。私たち大人が、ファンタジー小説に魅力を感じ続ける理由の1つをここに見出すことができるだろう。

私たちは「わからない状態からわかる状態へ」「非合理から合理へ」というように、常に右肩上がりの発達を当たり前のもので想定しがちである。しかし、あり得ること・あり得ないことの区別が可能になった後であっても、あり得ない想像を無駄なものとして一切おこなわなくなるわけではない。たとえば、「ある人の夢を見て、その人に不幸が起こるなんて、偶然で起こるとは思えない。きっと不思議な力によるものに違いない」というように、何か不幸なことが起こったときなど、私たちは客観的な視点からの解釈をおこなうことが難しい場合がある。このような事例は、因果論的にはあり得なくとも、確率的にあり得る話であり、単なる偶然ではないと私たちが直感的に推論しているから見られるものだと指摘されている (菊池, 1995)。これまでに、子どもは4歳くらいまでには、心と外界の関係に関する理解が獲得されるという知見が示されてきたが (Perner, 1991), それらの研究の多くは文化的文脈との関連性を検討してはいない。私たち大人が心と外界の関係に関して持っている認識は、文化の違いに応じて異なるであろうが、それが子どもの心と外界の関係に関

する認識に影響を与えている可能性は十分に考えられる。今後は、大人の認識をさらに詳しく調査し、それと子どもの認知発達との対応関係について詳細に検討することを課題としたい。

## 引用文献

- ベネッセコーポレーション教育研究所. (1994). 「おばけとジンクス」受けとめ方・関わり方. 東京：ベネッセコーポレーション.
- Gilovich, T. (1993). 人間この信じやすきもの：迷信・誤信はどうして生まれるのか (守一雄・守秀子, 訳). 東京：新曜社. (Gilovich, T. (1991). How we know what isn't so : The fallibility of human reason in everyday life. New York: The Free Press.)
- 井原成男. (2009). ウィニコットと移行対象の心理学. 東京：福村出版.
- Karmiloff-Smith. (1990). Constraints on representational change : Evidence from children's drawing. *Cognition*. 34, 57-83.
- 加用文男. (2010). 幼児の想像遊びにおける多視点態度性. *心理科学*, 30(2), 43-56.
- 菊池聡. (1995). 予知体験の不思議. 菊池聡・谷口高士・宮元博章 (編), 不思議現象：なぜ信じるのか こころの科学入門 (pp.19-49). 京都：北大路書房.
- Perner, J. (1991). *Understanding the representational mind*. Cambridge, MA : MIT Press.
- 富田昌平. (2002). 幼児期における空想の友達とその周辺現象に関する調査研究 (2), *幼年教育研究年報*, 25, 79-86.
- 富田昌平・山崎晃. (2002). 幼児期における空想の友達とその周辺現象に関する調査研究 (1). *幼年教育研究年報*, 24, 31-39.
- 塚越奈美 (2007). 子どもの願いごとに関する理解やその効力への信念に対する親の認識. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 1, 35-44.
- ヴィゴツキー. (1974). 新訳版 子どもの想像力と創造. (広瀬信雄, 訳, 福井研介, 注). 東京：新読書社.
- Woolley, J. D. (2000). The development of beliefs about direct mental-physical causality in imagination, magic, and religion. Chapter in K. Rosengren, C.N. Johnson, & P.L. Harris (Eds.) : *Imagining the impossible : Magical, scientific, and religious thinking in children*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Woolley, J. D., Phelps, K. E., Davis, D. L., & Mandell, D. J. (1999). Where theories of mind meet magic: The development of children's beliefs about wishing. *Child Development*, 70, 571-587.